「ユナイテッド・ネーションズ」への道（一）

――イギリス外交と「大同盟」の成立、一九四一―四二年――

細谷雄一

はじめに
一　イギリスとソ連――戦争協力と戦後構想
(一)　連合国間協力の必要
(二)　英ソ協力と戦後計画
(三)　スターリン＝チャーチル書簡
(四)　ビーヴァーブルック・ミッション
(五)　イーデンとソ連
(六)　イーデン＝スターリン会談
……（以上本号）
二　イギリスとアメリカ――「英語諸国民」の結束
(一)　「連合国間調整」と戦後構想
(二)　ワシントンへの出航
(三)　「四大国」構想の胎動
(四)　ホワイトハウスでのクリスマス
三　「連合国宣言」の成立
(一)　準備作業
(二)　「連合国宣言」へ
おわりに
……（以上八三巻五号）

はじめに

カナダのアルジェンティア湾において、ウィンストン・チャーチル首相とフランクリン・ローズヴェルト大統

領が「大西洋憲章」に合意した一九四一年八月一二日。この二人の連名のメッセージが、モスクワのヨシフ・スターリンのもとへと送られていた。それは、英米両国間で育んでいる協力関係を、ナチス・ドイツ軍と激しい戦闘を続けているソ連にまで広げるためのものであった。英米両国にとって、ヨーロッパ大陸の大半を支配するヒトラーのドイツに勝利するためには、ソ連との戦争協力に依存せざるを得ない。スターリン宛のメッセージには、次のように書かれていた。

「ハリー・ホプキンス氏のモスクワからの帰国後の報告を受けて、ナチスの攻撃に対抗して賞賛すべき防衛を続ける貴国へ向け、われわれ両国がどのようにして支援をすることができるか考慮する機会を得ました。われわれは現時点で、貴国が緊急に必要とするような物資をまさに最大限提供できるよう、手を取り合っています。積荷された船がすでに数多く出航しており、さらに多くが今後直ちに出航することになります」(1)。

ナチス・ドイツ軍が支配を広げるヨーロッパ大陸で、地上兵力において大きく劣るイギリス単独でドイツ軍の強大な勢力を押し返すことは、事実上不可能であった。戦勝への希望は、巨大な大陸国家であるソ連との戦争協力に大きく依存していたのだ。それゆえ独ソ開戦を転換点に、イギリス政府はアメリカ政府とともに、ソ連政府に対してこのように最大限友好的なメッセージを伝えたのである。まずは、スターリンをはじめソ連の指導部に深く浸透する英米両国に対する不信感を払拭せねばならない。ロシア革命干渉戦争以降、独ソ不可侵条約を経て独ソ開戦に至るまで、英ソ関係の底流にはきわめて冷たい相互不信が存在していた。それゆえ友好を示すメッセージを具体的に裏付けるものとして、ソ連国民に対する英米両国からの支援が不可欠と見なされていた。実際にソ連の首脳も、両国からの経済的および軍事的支援を希求していた。ナチス・ドイツという目前の恐怖が、双方を結びつけたのだ。

しかしそれだけではなかった。より長期的な視野からも、新しい秩序を構築する上でソ連との協力関係が不可

欠であるとイギリス政府首脳は感じていたのである。この連名メッセージは次のように続く。「われわれは今、より長期的な考慮へと目を向けなければなりません。というのも、われわれの努力や犠牲が無駄とならないような完全な勝利を手にするためには、これから長く険しい道を進んでいかなければならないからです」[2]。その上でチャーチルとローズヴェルトの二人は、「モスクワで開催される会議を準備するよう提案します」とスターリンに伝えた。英米両国政府は、特使をモスクワに派遣して今後の協力体制の確立へ向けた協議を行う方針であった。このときイギリス政府は、ソ連を加えた巨大な「大同盟（the Grand Alliance）」を結集させて、より効果的な戦争物資の活用と戦略の調整を必要としていたのである。

大西洋憲章が発表される一九四一年八月から、英米およびソ連の「三大国（the Big Three）」が中心となって「連合国宣言（the Declaration by the United Nations）」を世界に公表する一九四二年一月までの五カ月間は、第二次世界大戦の行方を決定づける重要な時期であると同時に、戦後構想の輪郭が浮かび上がる上でもきわめて重要な時期であった。実際の戦後構想の具体化の作業は、それ以後一九四二年から四五年の期間にかけて進められていくことになる。しかしこの一九四一年八月以後半年の間に、ソ連を加えた「三大国」が中心となって巨大な「ユナイテッド・ネーションズ」という勢力を結集させることは、その後半世紀を超える世界政治の行方を決定づけることになる[3]。本稿ではチャーチル首相とアンソニー・イーデン外相を中心に、そのような国際的な枠組みが作られていく上でイギリス政府がいかなる役割を果たしていたのかを描くことにしたい。

一　イギリスとソ連――戦争協力と戦後構想

(一)　連合国間協力の必要

この頃、イギリス政府が戦争指導を進める上での大きな課題となっていたのが、ナチス・ドイツに対抗する連合国諸国をどのように束ねて、結束を固めていくかであった。戦争を勝利に導くために連合国（the Allied Powers）としての結集を目指すことは、一九世紀初頭のナポレオン戦争の時代以来、イギリスにとっての一つの外交的伝統ともいえるものであった。イーデン外相もまたそのような伝統を受け継いで、連合国間の結束を深め、さらにはアメリカやロシアと連携して、それを巨大な勢力へと拡大する重要性を認識していた。[4] そのような巨大な勢力の集結こそがイギリスを戦勝へと導き、さらには安定的で永続的な戦後秩序をもたらすであろう。

そのことを明瞭に示すかのように、大西洋会談の二カ月前の一九四一年六月一二日の連合国調整会議（the inter-Allied meeting）において、イーデン外相は次のように述べていた。「このような会議を継続的に開催することは不可能だが、この会議によって協力への新しい段階の幕開けが告げられ、この会議がその機構を通じて戦争の勝利を手に入れ、さらには勝利の後の平和を維持するようになることを願っている」。[5] イーデンが言うところの「勝利の後の平和を維持する」ための「機構（organisation）」とは、その二カ月後に外務事務次官のアレクサンダー・カドガンを中心として起草される、大西洋憲章の第八項の「一般的安全保障のための広域的で常設的な体制」への言及へと結実する。[6] すなわち、平和を保障する「世界機構」としての「国際連合（the United Nations）」である。「勝利を手に入れること」と「勝利の後の平和を維持すること」は、この「ユナイテッド・ネーションズ」という枠組みによって一つにつながっていた。言い換えれば、この「ユナイテッド・ネーションズ」が形成されていく過程を理解することは、イギリスの戦争指導、連合国間の協力、さらには戦後秩序を理解

する上での鍵となるであろう。

イーデンは次のように、連合国調整会議の意義に触れている。「連合国間の協力の象徴として、特定の問題についての協議のためにこのような連合国調整会議をさらに続けていく可能性について、比較的大きな利益があることが明らかとなった。ドイツの支配から解放された後に、可能な限り早期にヨーロッパで食糧や原料を供給する方法を促進していく意図からも、イギリス政府がすでに発表したとおり、次回の連合国調整会議ではこの問題について討議することが適切なように思える。それはとりわけ、ロンドンにいる連合国亡命諸国政府や、本国で抑圧されている人々にとっての利益となるであろう」[7]。

ここで言及されている「連合国亡命諸国政府（the Allied Governments now in London）」とは、祖国がナチスに占領されたことでロンドンに亡命してきた、ベルギーやオランダなどの亡命政権を指していた。この時期はソ連とドイツが開戦を迎える時期であって、他方でアメリカはまだ参戦をしていなかった。真珠湾攻撃を半年後に控え戦争はまだ真の意味での「世界戦争」とはなっておらず、戦場もヨーロッパ大陸が中心であった。したがって「連合国」の枠組みもまたヨーロッパ諸国を中心としたものであり、同時にロンドンの亡命政権を中心としたものであった。そこでイギリスがリーダーシップを発揮することは自然なことであった。それを次第に、アメリカやソ連を巻き込んで世界大のコアリションへと広げていくことが、チャーチル首相やイーデン外相の重要な任務でもあった[8]。とりわけ、ソ連との同盟を締結して戦争協力を進めていくことは、最優先の課題であった[9]。そしてそれが、「ユナイテッド・ネーションズ」としてのコアリションの中核となっていく。

しかしながら、ドイツ軍がソ連への攻撃を開始してからすぐさま両国間の関係が良好となったわけではない。イーデン外相が回顧するには、この頃の「われわれとソヴィエト政府との関係は確かに、友好的と描写することのできるようなものではなかった」[10]。イギリスの駐ソ大使であったスタフォード・クリップスは、さらに厳しい

口調でチャーチルにその点を留意するよう、次のように警告していた。「われわれはこれまで、過去二〇年間の不信と疑念を払拭しようと努力をしてきたと思うが、しかしその背後には不信や疑念が存在し、その影響がときおり表出してくる際においても不寛容であってはならないよう、常に留意しなければならない」[11]。双方の側に蓄積していた不信感はそう簡単には拭い取れず、またチャーチル首相などのイギリス首脳は早期のソ連敗北を予期していたのである[12]。

ソ連の参戦という新しい事態を受けて、イーデンは七月五日のリーズでの演説において、またさらには七月二九日の外国記者協会や八月六日の議会討論において、連合国調整会議を近い将来に開催する意向を示した[13]。その会議には、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、ベルギー、チェコスロバキア、ギリシャ、ルクセンブルク、オランダ、ノルウェー、ポーランド、ソ連、ユーゴスラビア、そしてド・ゴール将軍が代表する自由フランスの諸国政府が加わる見通しであった。イギリス政府は、そこでの決議の草案をすでに八月一六日に用意していた[14]。それは何よりも、軍需物資や食糧供給について連合国間で協議する枠組みを規定したものであるが、同時にさらに長期的な目標、すなわち「世界機構」の設立を目指すことも視野に入れていた。このようにして、この時期においては戦争指導と戦後構想が、不可分の一体として繋がっていたのである。それを確実に繋ぎ止める実体を構築することこそが、イギリス政府にとって戦争に勝利するための重要な前提であった。その鍵は、ソ連との戦争指導および戦後構想をめぐる協力関係の構築であった。

(二) 英ソ協力と戦後計画

一九四一年八月一八日の戦時内閣は、チャーチル首相が大西洋航路をブリテン島へ向かい航行しており不在だったために、代理でアトリー副首相が議長となって夕方の五時から開催された。この閣議では、イーデン外相が

提案していた連合国調整会議開催の必要性が、議題に上った。[15] イーデン外相はその詳細を記したメモランダムを提出して、八月末頃までにそのような会合を開き、可能な限り早く協議を進める必要を説いていた。そこで難しい問題となるのは、戦後の国境線画定の問題であった。戦後処理を進める上で、いかにして国境線を画定するかという問題は、いつの時代においても諸国家間で大きな混乱や対立に繋がる。そのために、戦後の「領土（territories）」ではなくて、戦後の「人々（peoples）」の問題へ向けた協議を行うと文言を巧みに修正し、早期にそのような会議を開催することを要請する方向で議論はまとまった。[16] ひとたび「領土」すなわち国境線画定の問題を議題に加えるならば、確実に連合国間で不和が浮かび上がるであろう。他方で、そのような会議を開催する前に、イーデン外相が帰国後のチャーチル首相と十分な調整を行うよう閣議では要請がなされた。

翌日一九日の閣議では、帰国して急いで駆けつけたチャーチル首相がそこに加わることになった。閣議の冒頭では、チャーチルがローズヴェルト大統領との首脳会談の様子を臨席する閣僚たちに説明した。チャーチルの言葉によれば、「大統領はその会談をとても喜んでおり」、また会談は「限りない親密さが満ちあふれていた」という。[17] チャーチル首相はさらに、戦争の危機的な状況について「大統領に警告を与えることは、正しいことだと考えている」と述べた。すなわち、「もしもロシアが、いわば来年春までに和平を求めざるを得なくなって、加えてアメリカ参戦の希望がイギリスで根絶してしまうならば、どのような帰結に至るのか言葉にすることはできない」とローズヴェルト大統領に警告したという。すなわち、イギリスの敗戦と、ヒトラーのドイツの勝利、そしてナチスによるヨーロッパ支配の永続である。そのようなチャーチルの言葉に対して、「大統領はこれを真剣に受け止めて、自らが交戦状態に入ることを正当化できるような『事件』を見つけるつもりだ」と答えた。[18]

続けてチャーチルは、ロシアについて触れた。チャーチルが言うには、ロシアを援助するために「われわれはある程度の対価を支払わなければならないが、ロシアが前線で戦い続ける限りにおいて、それを行うだけの価値

があるであろう」[19]。戦争に勝利するために、ソ連の戦争継続は死活的に重要であった。この時点でイギリスの戦略として、ソ連とアメリカという二つの世界大国がイギリスの側に加わってドイツと闘い、「三大国」が緊密に協力して戦争指導を行う必要を感じていた。そのためには、それをまとめ上げるための強固な枠組みもまた必要であった。

他方で英米両国首脳による連名のメッセージを受けて、ソ連政府はイーデン外相にその協力の意向を伝えてきた。それについてイーデンは八月二五日の閣議で触れている。彼が述べるには、「ロシア人たちは、首相とローズヴェルト大統領の共同宣言におおよそ賛同している一方で、その宣言へと結びつくことを公に宣言する前に、われわれといくつかの点で協議を希望している」ようであった。そのような理由からも、イーデン外相は暫定的に八月二七日に予定されていた連合国調整会議を、数週間延期する必要を述べた。この「連合国政府（the Allied Governments）」に、ソ連も加える必要を感じたのだ。同時に、イーデンは次のように述べていた。「ロシア人たちは、ローズヴェルト大統領との会話の中で提起されたように、ロシア、イギリス、アメリカの代表がモスクワで会談することを求めている。九月一五日の日程を提案されたが、アメリカ政府代表がそのような早期の日程での実施を受け入れるかどうか、疑わしいように思える」[20]。英ソ間で戦争協力をめぐる協議を始めるだけでは十分ではない。あくまでも、そこにアメリカを加えて、英米両国として対ソ援助を進め、米ソ両国を戦争に結びつけることが重要だとチャーチルは考えていた。

スターリンにとっては国家の生存こそが唯一絶対的な必要であった。ヒトラー率いるドイツ軍の驚異的な破壊力の前に、モスクワは恐怖に包まれていた。九月一三日のチャーチル宛書簡の中で、「われわれの共通の目的へ向けて状況を改善するためには、第二戦線の樹立が最も根本的な処方箋である」とスターリンは繰り返していた[21]。さらには、「戦後の損害についてはドイツを犠牲にして補償されなければならない」と、冷酷かつ率直な所感を

チャーチルに伝えていた。そのような現実主義的なスターリンと手を組んで、共通の普遍的理念を掲げて戦後構想を組み立てていくことは、決して容易なことではなかった。しかし戦争遂行の上での必要性からも、いくつもの認識の差異を乗り越えて、まずは英ソ間の信頼関係と協力関係を深める必要があったのだ。英ソ両国政府ともに相互不信を乗り越えてそのような方向へと進んでいくことを求めていることが、次第に明らかになっていく。

九月一八日の閣議では、イーデン外相は早急に英米両国政府の特使がモスクワを訪問し、戦後ヨーロッパの復興計画についてソ連政府首脳と直接会って意見を交換する必要を指摘していた。イーデンが述べるには、「延期されている連合国諸国の会合を九月二四日の日程で行う準備を進めている」[22]。というのも「ロシア人は、首相とローズヴェルト大統領による共同宣言を、公式に受け入れる準備をした」からであった。いよいよ、ソ連が英米両国と足並みを揃える方向へと歩み始めた。依然としてアメリカは参戦をしておらず、また反共主義イデオロギーを長年保持してきたチャーチルにおいて、ソ連への不信感は依然強かった。しかしながらイギリスが戦争に勝利するためには、これら二つの巨大な大国と手を取り合うことが、唯一の希望でもあった。ナチス・ドイツがヨーロッパ大陸の支配を広げる絶望的な状況の中から、後の「ユナイテッド・ネーションズ」につながる希望が生まれていったのだ。

チャーチル首相は、九月二一日のスターリン宛の返信の中で、「三大国」を軸とした自らの世界秩序構想の輪郭を描いていた。それは、国家の生存をかけて目前の戦略的必要性を訴えるスターリンとは異なる、壮大な論調であった。チャーチルが、この三カ国が協力する地域として中国を挙げているのは興味深い。チャーチルは次のように書いている。「私はいつも、日本の侵略から自らの国土を守ろうと戦う中国の人々への同情を、あなた方と共有してきた。もちろんのこと、われわれはいかなるときも、日本を敵国の陣列に加えることを望んでいないが、ローズヴェルト大統領との会談で分かるように、アメリカの態度は日本政府に対してきわめて冷淡になって

いっている[23]」。そのような中、チャーチルによれば、日本の侵略の犠牲となっている中国に対して支援を行うこともまた、「三大国」間で協力を進めるべき重要な領域であった。そして次のように自らの戦後構想を語っている。「戦争が継続するとともに、人類全体の三分の二をそれだけで構成するイギリス帝国、ソ連、アメリカ、そして中国の、膨大な数の人々が、侵略者に対して共に手を取って前進していくようになるという希望を抱いている。そして彼らが歩む旅路の先に、勝利があると確信している」。この四大国こそが、後にローズヴェルト大統領が描く「四人の警察官」に該当し、また一九四五年になるとフランスをそこに加えて国際連合の安全保障理事会常任理事国を構成するようになる。チャーチルはソ連軍の貢献を賞賛することで、筆を止めている。次第にチャーチルの頭の中で、戦後構想が浮かび上がってきたのだ。

㈢ スターリン＝チャーチル書簡

このようにして、八月の大西洋会談でローズヴェルト大統領と共同宣言を発表した後には、イギリス政府にとってソ連との戦争協力の促進が最優先課題となっていた。その中でも重要なのが、ソ連軍がナチス・ドイツとの戦闘を持続することが可能となるような軍需物資をソ連に提供することであった。この問題に関して、その中心となって取り組むことになるのが、軍需相でありまたチャーチルの長年の盟友のビーヴァーブルック卿であった。ビーヴァーブルックは、八月にはチャーチル首相に同行して大西洋会談に参加しており、その後ワシントンに向かってアメリカ政府高官と対ソ援助問題の協議を続けていた[24]。

大西洋会談から帰国したチャーチルは、八月一九日の閣議で次のように述べていた。「ビーヴァーブルック卿が帰国したら、彼はモスクワへと向かわねばならないであろう。もし外相もまた自らがモスクワを訪問して、より全般的な政治的な諸問題について協議することを考えているのであれば、その訪問によって善意が生じること

は疑いない。しかしながら、軍需物資援助の技術的な側面については、ビーヴァーブルック卿によって対処されるべきである[25]」。このように、チャーチル首相は英ソ協力の促進に関して、ビーヴァーブルック軍需相とイーデン外相の二人に任せる意向であり、実際にこの二人が後にそれぞれモスクワを訪問してスターリンと会談することになる。そして八月三〇日にチャーチルは、ビーヴァーブルック宛の書簡の中で直接、「ロシア軍の軍需物資を長期的に供給するために、ハリマン氏とともにあなたがモスクワへと向かうよう希望している」と伝えている[26]。

チャーチルは必ずしも、それまでの反ソ的な感情を捨て去ったわけではなかった。ソ連との協調関係の発展に以前から積極的であったイーデン外相とは異なり、チャーチルの場合はあくまでも戦略的な必要性から冷徹にスターリンと手を組む必要を感じていたに過ぎなかった[27]。それゆえにビーヴァーブルックに次のように釘を刺していた。「あなたの役割とは単にロシアを援助する計画を形成するというのではなく、われわれがこの間に敗北することがないように留意することだ。たとえあなた自身がロシアの空気の中にあって共感を覚えたとしても、私はここにいて冷徹であるであろう[28]」。このようにしてチャーチルは、第二戦線の問題にしても対ソ軍需援助の問題にしても、過度な譲歩を慎むようビーヴァーブルックに対して警告していた。チャーチルはイギリスの生存と安全を最優先し、それゆえに「一九四二年半ばか年末」になるまでソ連へ物資が送られることはないと考えていた。

九月四日、モスクワではソ連のヴィシンスキー副外相がスタフォード・クリップス大使と会談して、スターリンのチャーチル宛書簡を手渡していた[29]。「モロトフ外相がインフルエンザに罹ってしまった」ために、ヴィシンスキーがその代役となっていた。ちょうどその頃ロンドンでは、大西洋憲章に応えて英ソ交渉を始めるためのスターリンからの返答がいつまで経っても届かないことをチャーチル首相は不満に感じていた[30]。それに呼応するかのように、ようやくスターリンも英ソ交渉の時期などについて、真剣に検討するようになった。スターリンのチ

ャーチル宛書簡は冒頭において、「これまでの約束の二〇〇機に加え、追加して二〇〇機の戦闘機をソ連に売却する約束をしてくれたことへの謝意を示す」と記されていた。[31] しかし同時に、それが迅速に進められなければ、東部戦線に深刻な影響を及ぼすと警鐘を鳴らすことも忘れなかった。スターリンが求めていることは明らかであった。それは、すぐさまイギリス軍がヨーロッパ大陸に上陸して、西部に第二戦線を開くことであった。イーデンの表現を用いれば、「スターリンのメッセージは、援助の懇願」であった。[32]

ロンドンでは、九月四日の夕方にマイスキー駐英大使がこのスターリンからの書簡を、チャーチル首相に直接手渡すことになった。この重要な面会の席に、イーデン外相も同席していた。マイスキー大使はその書簡の主要なポイントについて、口頭で説明を加えた。その中でも最も重要なのは、西部戦線でイギリスが第二戦線を開くことであった。この点についてチャーチルは、「ロシアの戦線からドイツ軍を引き離すような方法で、大陸で作戦を展開することがわれわれには不可能な、様々な理由」をマイスキー大使に説明した。[33] 他方でマイスキー大使は、「これは、歴史における転換点となるであろう」と、ソ連がナチス・ドイツの攻撃に耐える重要性を強調した。[34] だからこそ、ソ連政府としても英米両国政府との間で、早急に戦争協力の詳細を詰める必要があった。

マイスキー大使は次のように続けた。スターリンの意向によると、「モスクワでの会談では、戦略的な問題についても議題に含めるよう、視野を広げることを考慮すべきだ」という。[35] それまでは、それぞれ別個に計画を立てていた英米ソの三大国が、「合同の計画を立てること」が重要なのだ。イギリスのビーヴァーブルック卿とアメリカのアヴェレル・ハリマンの二人の特使がまもなくモスクワを訪問する予定となっており、この会談こそが英米ソ三国間の協調関係を構築する重要な起点となるはずであった。チャーチルは「われわれのミッションを派遣する上で、いかなる時間も失っていないし、失うつもりもない」と述べていた。[36] ハリマン特使の日程と調整した上で、英米共同でソ連政府にアプローチすることが重要だと考えていた。

モスクワ会談の日程がようやく固まった。九月一八日の閣議で、イーデン外相が述べるには、「延期されていた連合国間の会談が、九月二四日に開催される方向で調整された」。ようやくこれによって、「ロシア人は、首相とローズヴェルト大統領による共同宣言へと、公式に自らが連帯する段階となった」のである。[37] この閣議では引き続き、日本のロシアや中国に対する攻撃の可能性に言及し、イギリス政府としての行動の指針を協議していた。七月の日本軍による南部仏印への進駐を受けて日米関係は緊張の度合いを高め、またそれが英領マラヤやロシアへの攻撃に転化する可能性を懸念していた。ドイツ軍の怒濤の攻撃を前にして、さらなる日本の参戦をも考慮に入れながら、イギリス政府は勢力均衡の観点からもアメリカやソ連との協力を深めていく必要性を強く認識していたのだ。[38] このとき英独間の戦争はグローバル化していき、徐々に世界大での敵対関係が浮かび上がってきた。それによって、世界全体としての戦後安全保障の構想を考慮に入れる必要も生じたのだ。

チャーチル首相は、そのような英米ソ三大国の提携、とりわけ英米両国間の緊密な協力関係に、世界史的な意義を与えていた。九月二一日のスターリン宛の書簡の中で、チャーチルは次のように述べる。「戦争が続くとともに、人類全体の三分の二を占めるイギリス帝国、ソ連、アメリカ、そして中国の偉大な人々が、彼らの迫害者に対抗してともに歩んでいることに気がつくという、希望を抱いています。そして、彼らが旅を続けるその道の先には、勝利が待っていると確信しています」。[39] また九月二二日、ウィンザー公爵宛の書簡の中で、この戦争の意義をチャーチルは次のように伝えていた。「それは、正義に溢れた大義の勝利が確保されるまで続くでしょうし、さらには英語諸国民が世界に向けて、自らの模範によって、さらには自らの援助によって、死と破壊という暗黒の谷底の中から人類すべてをより豊かな文化と繁栄の時代、歴史上のほかのいかなる時代よりも希望によって照らし出され、よりあたたかく祝福された安全保障と社会的正義の時代へと導いていく、さらなる任務が与えられる機会を得るまで、続くでしょう」。[40] チャーチルの脳裏には、世界規模の勢力均衡をあくまでも自らに有利

な方向へと導いていくという戦略的な思考と同時に、「英語諸国民（English-Speaking People）」の理想を模範として、世界全体をよりよい社会へと導こうとする進歩主義的で文明論的な壮大な使命感が見られるのであった。[41]

そのようなチャーチルにとって、これから開かれるモスクワでの英米ソ三国間の協議は、きわめて重要な意味を持っていた。すでにビーヴァーブルックがモスクワに到着していた九月三〇日には、ロンドンの下院議会演説でチャーチル首相は次のように語った。「さて、ここで私が勇気づけられる性質の観測をさせて頂くことをお許し頂きたい。われわれはもう、孤独ではない。一年ほど前には、われわれは完全に孤独であるかのようだったが、しかしながら時間が経過するとともに、われわれの迅速な行動と敵の犯した数々の過ちによって、とても偉大な二つの国家と国民に、最も親密で友好的な接触と協調をもたらしたのだ。東を向いても、西を向いても、われわれはもはや孤独ではないのだ」。[42] チャーチルならではの華麗なレトリックによってイギリス国民に勇気を与えようとしていた。戦争の潮流が変わり始めた。実際には、チャーチルが述べるようなかたちでこの「三大国」が結束を固めていたわけではなかった。ソ連軍の敗北を避けるための、英米両国による軍需物資の援助を行うための会談がモスクワで始まったばかりであった。だが、チャーチルはそのような相互不信に溢れる現実を覆い隠して、国民を鼓舞せねばならなかったのだ。[43] 同時に、「われわれはもはや孤独ではない」というレトリックは、後に浮かび上がる「ユナイテッド・ネーションズ」としての結集に繋がる伏線でもあった。

㈣　ビーヴァーブルック・ミッション

九月二九日、モスクワでは、ビーヴァーブルック卿がイギリス政府代表団長としてソ連首脳との会談に参加することとなった。[44] ちょうど独ソ戦がはじまって百日が過ぎたことになる。本来は、二四日に開始するはずであったが、主としてアメリカ政府代表の到着の遅れによって予定をずらすことにした。「事態の緊急性」に鑑みて、

クリップス駐ソ英大使はそのようなアメリカ政府の姿勢を「苛立たしい」と記している。[45] その間に、ロシア兵は次々と戦場で倒れていき、また戦争物資も枯渇していったからだ。

アメリカ政府からはアヴェレル・ハリマンが特使としてモスクワに派遣され、ビーヴァーブルックに同行していた。この二人は、ソ連に対する軍需物資の援助を協議して、英米両国とソ連との協力関係を深めるというきわめて重要な任務を背負っていた。ビーヴァーブルックとハリマンの二人は、予定通り夜九時にスターリンのいるクレムリンに到着した。すでにドイツ軍はウクライナの首都キエフを完全に包囲しており、二人の英米政府代表がモスクワに到着する頃にはドイツ軍がモスクワ近郊まで迫ってきていた。ハリマンによれば、「夜には、ロシア軍の対空砲の閃光を目にすることが出来た」という。[46] またビーヴァーブルックの観察によれば、「スターリンはとても落ち着きがなく歩き回り、またずっとたばこを吸い続け、そして二人から見ると極度に緊張しているように見えた」という。ソ連参戦後はじめての英米ソの「三大国」政府代表による会談は、このような緊張感の中で幕を開けたのである。

一〇月一日には、ハリマン、ビーヴァーブルック、そしてソ連外相のモロトフの三人が会談を行い、ソ連に対する軍需物資支援の具体的な内容について協議を行うことになった。そこでの議題は、軍需物資のソ連への援助についての具体的事項がほとんどであった。とりわけスターリンは、英米両国からの援助に非常に強い謝意を示していた。その喜びを象徴するかのように、一八世紀につくられたエカテリーナ・ホールでのスターリン主催の特例ともいえる晩餐会は、豊富なアルコールとともに夕方六時から延々と深夜の一時半まで続いた。[47] 「われわれが今、誠実な友人を得たことに、私はとても満足している」とビーヴァーブルックは記している。[48] しかしながら、「われわれは、彼らの熱意を過大評価してはいけない」というのも、「彼らは、約束が守られることを信じているからだ」。はたしてイギリス政府はどこまで真剣に約束を守り、ソ連を援助するつもりなのであろうか。英ソ

協力は、必ずしも相互信頼や友情により結ばれているものではなかった。あくまでも怜悧な計算こそが、それを支えていたのである。

一〇月二日の夕方四時に、モロトフ外相、ハリマン特使、そしてビーヴァーブルック特使の三人によって合意文書に署名がなされ、会合は閉幕した。[49] この合意の到達に、ロンドンでチャーチル首相は熱狂的に喜んだ。チャーチルはビーヴァーブルック宛の書簡で、「あなた以外、誰もそのように成し遂げることは出来なかっただろう」と、その労を称賛した。さらに、「ここにいて、楽観的な感情を抑えることは不可能だ」とまで述べ、喜びを表現している。[50] それまで孤独な戦いに苦しみ続けてきたチャーチル首相に、勝利という一筋の光が見えた瞬間であった。この「三大国」が、大同盟としての結束を確立し、「ユナイテッド・ネーションズ」としての世界秩序の枠組みを形づくっていくことができるかどうか、この時点では依然として確かではなかった。しかし会談後、一〇月三日にスターリンからローズヴェルト宛に送られた書簡を見ると、スターリンはこの会談に満足し、英米両国政府の対ソ支援の申し出に対して感謝をする意向を伝えている。[51] 順調で慎重な滑り出しであった。

しかしながら、モスクワでこの会談開催の準備を行ったクリップス英大使は、そのようには感じていなかった。ここに至るまで一貫して、より緊密な英ソ戦争協力を求めるクリップス大使と、むしろ自国の生存を最優先し対ソ援助を限定的にとどめようとするチャーチル首相との間で、激しい意見の対立が見られていたのだ。駐ソ英大使館に勤務するクリップスの側近のジェフリー・ウィルソンもまたクリップス大使同様に、この会談に次のような不満を抱いていた。「要するに、この国とわが国との間で満足すべきものは何もないのだ。これは、必要に迫られた同盟であっても、それ以上ではない。その弁解をだらだらと述べることが出来ても、その事実は残る」。最大の不安は戦後秩序についてであった。「私の悪夢の一つは、私の予想通りにロシア軍が成功を収めて、終戦の際にベルリンまで侵攻して、東欧のすべての拠点を占領することである。そうしたら、われわれはどのように

彼らをそこから追い出せるのだろうか？　ペルシャについても同様である。私が考えるには、彼らに対するわれわれの影響力は、今彼らをどのように処遇するかに大きく懸かっており、だからこそ軍事的および経済的な物資供給の問題に加えて、私はどうにかして『彼らとともに歩む』ことが何よりも重要だと考えているのだ[52]」。

クリップスもまた、次のように記している。「他方で、私はむしろ、彼らとの協力の中から新しいヨーロッパを構築できる可能性を強調する傾向がある。長期的には、これによってこそ世界に巨大な好機を提供することができるだろう[53]」。チャーチルの対ソ観がきわめて冷徹でリアリスティックなものであるとすれば、クリップスの対ソ観もまた異なる文脈で冷徹でリアリスティックであった。というのもクリップスは、ソ連が東欧を支配することが確実であるとすれば、ソ連との協調なしには戦後秩序を構築することが困難と考えていたからだ。しかしながらイギリス政府はチャーチルのリアリズムを選択し、後に終戦を迎えることになる。

一〇月一〇日午前にモスクワから帰国したビーヴァーブルックは、早速チャーチル首相とイーデン外相のもとに急行し、モスクワ会談の詳細を報告することになった。イーデンの日記によれば、それは「とても生き生きとして楽しめるもので、彼ははっきりと満足していると主張した[54]」。また、ビーヴァーブルックは「スターリンはどのようなことがあっても戦いを続け、また一九三五年には確かにそうではなかったが、今や冷酷な怒りとともにヒトラーを憎んでいる」と伝えた。午後にはそこにハリマンも加わり、ロシアの問題について意見交換を続けた。ハリマンがイーデンに個人的に伝えるには、「スターリンは戦後の同盟について言及し、それをマックス（ビーヴァーブルック―引用者註）に提案した」という。「もしもわれわれがそれにいかなる返答もしないならば、S（スターリン―引用者註）は不快に感じるであろう[55]」。スターリンは明らかに、より長期的な視野から自国の安全保障を考えていたのである。

㈤ イーデンとソ連

アンソニー・イーデン外相は、イデオロギー的にソ連に親近感を抱いていたわけではなかった。[56] むしろ、他の多くの保守党政治家と同様に、歴史的および地政学的な考慮から、イギリスがソ連と親密な友好関係を構築することの困難を理解していた。しかしながら、イギリスが戦争に勝利するための選択肢は限られていた。もう一つの大国であるフランスがすでに降伏してヒトラーの支配下にヴィシー政府が樹立され、ヒトラーのドイツがヨーロッパ大陸での圧倒的な支配を確立し、他方で極東では日本がよりいっそうイギリス帝国の領土と権益を脅かしていた。それにも拘わらず、アメリカ国民は一九四一年秋の時点で依然として参戦には消極的であった。だとすれば、イギリスがこの戦争に勝利するためには、陸軍大国であるソ連との提携が不可欠であったのだ。そのような論理的帰結から、イーデンはソ連との戦争協力を深めていく方途を模索していた。

他方で、ソ連政府から見れば、チャーチルとローズヴェルトの大西洋会談以降、英語という言語でつながる英米両国が戦後構想をめぐってソ連を排除して水面下で連携しているのではないかという猜疑心が募っていた。[57] そのようなソ連政府の懸念を払拭するためにも、特使ではなくイーデン外相自らが戦火をくぐって、直接モスクワへとソ連の指導者スターリンに会いに行くことが重要であった。その前に、はたしてソ連政府がイギリスに何を期待しているのかを、より正確に理解する必要があった。

九月二九日のモスクワ会談の席で、スターリンはビーヴァーブルックに向かって、「戦時中ばかりでなく、戦後についても両国間の将来の関係について問題を提起し、何らかのかたちの同盟を提案した」という。[58] しかしそれがいったいどのようなことを意味しているのか、明らかではなかった。一〇月一七日にロンドンで、イーデンはマイスキー大使と会談する中で、「同盟とは、スターリンはいったい何を念頭に置いているのか」と尋ねた。[59] 他方でイギリス政府としては、「ソ連との戦時中の協力関係を、戦後処理や、さらにはその後においても維持す

るつもりである」とイーデンは語った。しかしながらイーデン外相としても、講和目的に関する議論について「大西洋憲章で規定したこと以上のことを現段階で行うのは、現実的ではないと考えている」とも率直に伝えた。[60] あくまでも、大西洋憲章を出発点として、英ソ間での戦後構想を協議することが重要であった。

イーデンは、ソ連やアメリカとの協力関係を深めていく上で、「戦後構想」についてもより具体的に詰めていく必要を感じていた。一一月一〇日のクリップス駐ソ大使宛の書簡でも、「われわれの戦後におけるソ連政府との関係についての問題を、検討し始めなければならない」と言及している。とはいえ、「戦後の同盟（a post-war alliance）」について、スターリンが明確な意図や方針を明らかにしない限り、イーデン外相としても対応をしかねていた。同時に、「戦況が改善するに応じて、戦時中ばかりでなく講和についての将来の協力の計画に関しても、ソ連政府と、よりいっそう頻繁な協議の機会を見いだすべきであろう」と述べていた。[61] イーデンは、反ソ的な政治家が居並ぶイギリス政府の中でも例外的に、積極的にソ連との協力を促進し、「戦後平和の機構化」に取り組もうとしていた。それが後の、「世界機構」すなわち「国際連合」へと繋がっていく。

一一月一一日にはロンドンで、マイスキー大使がチャーチル首相とイーデン外相と面会し、スターリンから送られてきた書簡を手渡していた。そこでスターリンは、「戦争目的や戦後平和の機構化について、両国間で明確な了解が存在しない」点について懸念を示しており、その点をイーデンも気にしていた。[62] スターリンは、「戦後平和の機構化」について協議がなされなければ、両国間で真の意味での信頼は生まれないと考えていた。チャーチル首相は、マイスキー大使との会談の終わりで、この問題については閣議で検討したいと述べた。[63]「しかしながら、首相が全く戦後問題について考慮する気がないという問題があった」。イーデンはこのように述べて、チャーチルの消極的な姿勢に不満を感じていた。確かに、「主に戦争指導の重責に堪えねばならない人物にとってそれはむしろ当然なことかもしれない」が、それでも「ロシア同様にアメリカも、まさにこれを行うことを欲し

ている以上、同盟関係を固めていくためには、そのような状況を続けることはますます困難になっていくのだろう[64]。しかしチャーチルがイギリスとソ連との協力関係を深める役割を積極的に担うのは難しい。それには二つの問題があった。それは、「ウィンストンの赤いロシアへの本質的な嫌悪感と、戦後の問題を全く考慮しようとしない彼の根本的なやる気のなさ」である[65]。イギリス政府内で最もこの問題を真剣に考えているのは、イーデンであった。この頃、イギリス政府内では、イーデン外相がソ連政府との協力関係を模索することへの、根強い嫌悪感が蔓延していた[66]。イーデンは政府内のそのような空気を退けて、長期的な視野からもソ連との協力関係を育む重要性を説得し、そのことをチャーチル首相もある程度理解するようになった。

それゆえに一一月二一日になると、チャーチル首相はこの点について、次のようなメッセージをスターリンに送った。「われわれは近い将来に、モスクワあるいはそれ以外の場所へと、あなたもご存じの外務大臣のイーデンを訪問させたいと考えています」。さらには次のように記した。「あなたが、戦後平和の機構化について意見交換することを望んでいることは承知しております」。そしてチャーチルは、次のように続ける。「われわれの意図は、どれだけそれが長く続いたとしても、継続的に最大限協議をした上であなたがたと同盟を組んで戦争を戦うことであり、戦争に勝利したあかつきには、望むらくは、ナチズムを打倒する主要なパートナーであり主役となるソヴィエト・ロシアとイギリスとアメリカの三カ国が、勝者のテーブルで会合するようになると確信しています[67]。そして、「外相は、あなたとこの問題全体について協議することが出来るでしょう[68]」。チャーチルの脳裏にあったのは、「三大国」であるイギリス、アメリカ、ソ連の三カ国が中心となって、戦後秩序を構築することであった。

この時期の英ソ協力の背景には、日本との戦争の可能性という懸念があった。もしも日本軍が北進をして交戦状態に入るならば、すでにモスクワがドイツ軍に包囲されて敗北の直前まで追い詰められているソ連にとって、

極めて危険な状態に陥ることを意味する。半年前の一九四一年四月に松岡洋右外相が訪ソして日ソ不可侵条約を締結したものの、そのような条約の合意に信頼するのみではあまりにも危険であった。スターリンはむしろ、英米両国との協力関係を強化することで、日本政府を牽制することを念頭に置いていた。実際にチャーチル首相も、「われわれはもちろんのこと、日本がシベリアでロシアを攻撃する余地が生じるような方向で合意することは出来ない」とイーデン外相に語っていた[69]。そのまま極東での膠着状態が続き、日本政府が軍事攻撃を抑制し続けることを、チャーチルは望んでいたのである。

チャーチルは一一月四日のスターリン宛の書簡の中で、「われわれは最新鋭の戦艦プリンス・オブ・ウェールズを巡航させます。それによってあらゆる日本の艦船をインド洋に追い込み撃沈することが可能となり、そこで強力な艦隊を形成するでしょう」と述べ、スターリンを安心させようとした[70]。しかしそのようなチャーチルの願いもむなしく、一一月二六日にアメリカ政府がハル・ノートを伝えると、日本の東条英機内閣は真珠湾攻撃へ向けて連合艦隊を動かし始めていた。英米ソの三大国が協力関係を固めようとし始めたときに、日本政府もまたナチス・ドイツの側に立って戦争に参加する準備を始めたのである。それはまた、アメリカ参戦の瞬間が近づいていることをも意味していた。

㈥　イーデン＝スターリン会談

一二月七日午後、いよいよイーデン外相がモスクワ訪問へ向けてロンドンを出発することになり、ユーストン駅から列車に乗って北上した。イーデン外相を筆頭に、イギリス政府代表団には優れた見識を持つ外交官が多く加わっていた。外務事務次官のアレクサンダー・カドガン、イーデンと長年の信頼関係にある外相秘書官のオリヴァー・ハーヴェイ、中欧局の若手外交官フランク・ロバーツ、さらにはソ連の駐英大使であるマイスキーも同

行していた。[71] この訪ソは戦争の行方を左右する上で極めて重要な、大きな意義を持つ外交会談となるであろう。そのような歴史的重要性を十分にイーデン外相も認識していた。奇しくもそれは、現地時間でハワイの真珠湾が攻撃される同じ日のことであった。歴史が音を立てて、大きく回転し始めていた。

翌朝列車の中で、イーデンは自らの体調が優れずに悪寒がすることに気がついた。[72] スコットランド北部のインヴァーゴードンに到着してから医者に診てもらうと、インフルエンザに冒されていることが判明した。スキャパ港から巡洋艦に乗船して出港する前に、そのことについてチャーチル首相に電話をして伝えると、驚くべき返答が返って来た。チャーチルは興奮した様子で、日本の真珠湾攻撃を伝えた。この知らせを聞き、イーデンもチャーチル首相と同様に自らの安堵を示した。どれだけ時間がかかるにせよ、これで戦争が勝利に至ることを確信したのである。[73] 英ソ間の戦争協力を確立するためにイーデンがモスクワ訪問へと出発するまさにそのときに、それまでチャーチルとイーデンが渇望していたアメリカの参戦が実現した。イギリス政府が追い求めていた英米ソの三国間の「大同盟」の輪郭が浮かび上がる瞬間でもあった。このおぼろげな輪郭を、明瞭に組織化することこそが、イーデン外相に課せられた重大な任務であった。

戦争の潮流の変化を感じ取って、チャーチルはすぐさまワシントンへの訪問を考えた。チャーチルはイーデンとの電話での会話の中で、イーデンがそのままモスクワへ向かい、自らがワシントンへと向かう必要を説いた。首相と外相が共に、戦時中に自国を離れる懸念をイーデンが伝えると、チャーチルは「われわれの二つの偉大な同盟国の意図こそが、今では重要なのだ」と応じた。[74] この二人の指導者それぞれが、「大同盟」を確立するために奔走していた。それがどのように確立していくかが、戦争の行方を決することになるからであった。その後イーデンは、駆逐艦に乗船してスキャパ港を離れた。一二月八日のことである。それから一行がロイヤル・ネイヴィーの巡洋艦ケントに乗り換えてロシアへと向かう五日間の船旅の間、イーデンはインフルエンザのためにずっ

とベッドに横になっていた。

一二月一二日、濃霧の中でバレンツ海に面するロシアの港湾都市ムルマンスクに到着したイーデン一行は、翌日には雪嵐の中で列車へと乗り込み、列車に搭載された地対空砲の轟音が鳴り響く緊迫した空気の中で、一路スターリンのいるモスクワへと向かうことになった[75]。六〇時間の列車の旅となる。その間にも歴史は動いており、イーデン外相は変転する世界情勢について思索していた。アメリカの参戦は大きな希望であるが、他方で日本軍のシンガポール攻撃によってロイヤル・ネイヴィーの最新鋭艦のプリンス・オブ・ウェールズとレパルスが撃沈されたことは、イーデンにとっても大きな悲しみであった。一二月一五日の夕方五時に、イーデンを載せた列車がモスクワに到着した。列車の外はまだ雪嵐で、気温は氷点下三二度まで下がっていた[76]。駅にはモロトフ外相らが歓迎のために迎えに来ており、ソ連軍によるセレモニーの中でイーデンは下車した。目的地のモスクワに到着したイーデンら一行は、その夜には久々の陸上でのベッドで横になり、長時間の旅の疲れをゆっくりと癒すことになった。

翌一六日の午後七時にイーデンらはスターリンと最初の会談を行った[77]。それは豪奢な料理とともに夜の一一時まで続いた。ロシア料理の前菜ザクースカやシャンパンによる乾杯とともに、イギリスからの賓客を歓迎する晩餐会ははじまり、スターリンは落ち着いた様子でイーデンとの会話を続けた。マイスキー駐英大使が通訳を行い、スターリンはあまり表情も変えずに静かに発言を続けた。この会談の席で、スターリンはイーデンに二つの文書を示した[78]。一つは、戦時中の英ソ同盟に関する草案であり、もう一つは講和作業や戦後構想についての協力、具体的には戦後にドイツの軍事的脅威を抑えるための秘密協定を含んだ取り決めであった[79]。それは、大西洋憲章で示されたような領土変更に関するリベラルな合意を無視した、ソ連の安全保障を確保するための大胆な国境線の変更であった。

それからスターリンはイーデンに向かって、二つの質問をした。一つはドイツ軍によって被った戦争被害についてどのようにドイツから賠償金を確保するかであり、もう一つはいかにして戦後のヨーロッパで平和と秩序を維持するかであった。ソ連としては、何らかのかたちのヨーロッパの連邦化には反対しない、と伝えた[80]。スターリンは次のように述べた。「この目的のために何らかの軍事勢力が必要となるであろうし、民主主義諸国の間で軍事同盟があるべきだという希望が存在していると私は考えている。それは、何らかの審議会（a council of some sort）の下で組織化されるであろうし、その下に国際的な軍事勢力が存在することになるのだろう[81]」。これは後にイギリス政府内で検討されることになる「欧州審議会（a Council of Europe）」や「西欧同盟（a western union）」の構想にも繋がる考えであり、そのような考えをソ連のスターリンの側から提案するとは興味深い[82]。この時期には、将来のドイツの軍国主義の復活を考えて、それに対抗する勢力が西欧に存在することをむしろ好ましいと考えていたのだろう。それはまた、イギリス政府への一定程度の信頼感とも無関係ではないのだろう。

イーデンは、戦後ヨーロッパ秩序に関しては、スターリンの意向に大幅に同意すると伝えた。イギリスとソ連とアメリカによる、ドイツに対する何らかの軍事的管理についても間違いなく必要となるであろうと語った。他方で賠償金に関しては、第一次世界大戦での反省からも、金銭的な賠償金を取ることはしないと明言した。また戦後ヨーロッパ秩序に関する秘密協定に関しては、ローズヴェルト大統領がそれに明確に反対していることからも、イギリス政府としても同意することは出来ないと伝えた[83]。イギリス政府は八月にアメリカ政府との間で大西洋憲章を合意していた。イーデン外相としても、ソ連政府と協力関係を深めていく必要は十分に理解していたが、他方で大西洋憲章と真正面から矛盾するような領土変更を行うことは出来なかった[84]。結局、ソ連の領土変更、とりわけバルト三国の併合をイギリス政府が承認するか否かをめぐって合意が得られず、前述の英ソ条約の調印が難航することになる[85]。

スターリンが考える「戦争目的」や「戦後構想」とは、あくまでも赤裸々な領土変更に関するものがその中核を占めていた。そこには、バルト三国の併合や、フィンランドとソ連との国境線問題、ポーランド領土のソ連への併合やドイツの分割などが含まれていた。[86] そのような条件を受け入れるよう求めるスターリンは、イーデンに対して次のように述べる。「私の希望は、われわれ両国の戦争目的を一致させることであり、そうすればわれわれの同盟関係がもっと強大となるであろう。もしわれわれの戦争目的が異なるのであれば、同盟などというものは実現しない」。[87] しかしそのような要望を、イギリス政府として受け入れることは出来ない。イーデンは次のように応える。「私も同意する。私はわれわれの戦争目的が異なっているべきだとは全く思わないが、しかし国境線の問題は他の閣僚たちと協議をしなければならない。私の目的は、われわれ両国間の戦争目的の調整を詰めていくことである」。

スターリンは会談の中で、ドイツ分割の必要性にも触れた。スターリンは、ドイツを三つか四つの国家へと分割する必要性を述べた。[88] このイーデン＝スターリン会談におけるドイツ分割への言及こそが、四年後のポツダム会談での三大国間でのドイツ分割占領合意の起源となるものである。スターリンは、ドイツを三つか四つの国家へと分割する必要性を述べた。[88] このイーデン＝スターリン会談におけるドイツ分割への言及こそが、四年後のポツダム会談での三大国間でのドイツ分割占領合意の起源となるものである。スターリンが述べるには、「これこそが、ドイツが永久に弱体化するための唯一の保証となると考えている」という。[89] 彼が求めていたのは何よりも、戦後ソ連の安全保障を確保することであった。それがスターリンにとっての「戦争目的」である。しかしイーデンはそれに同意することはなかった。確かにイーデンは、「ドイツに対して、イギリス、ソ連、アメリカによる何らかの軍事的な管理が必要であることは疑いがない」と述べる。[90] そして、この三大国が、それに責任を持つべきであって、この原則には何ら反対はしない。しかし「バイエルンやラインラントの分離」となれば、同意できない。イギリス政府は、そこまで強硬なドイツ弱体化政策には反対であった。その点において、イーデンはスターリンに強い不信を感じた。

しかし、イーデンもスターリンも、英米ソの三大国が特別な責任をもって、戦後の平和を構築する必要について合意をしていた。イーデンは次のように述べた。「われわれは諸問題について両国間で協議をすることが出来る。しかし最終的には、平和条約に関しては、ソ連と、イギリスとアメリカがすべてそこに参加して、世界情勢の原則についてお互いに合意しなければならない」[91]。それについてスターリンも、「私も同意する」と返答した。これは、英米ソの三大国間で戦後構想について共同歩調を歩む必要をスターリンが明言した、最初の重要な瞬間である。まさにこの枠組みこそが、「大同盟」の基礎となり、「ユナイテッド・ネーションズ」の輪郭となっていく。その意味で、戦火に囲まれたモスクワでのこのイーデン＝スターリン会談は、歴史的な意義を有するものであった。夜の一一時に会談を終えて、イーデン外相は大使館に戻ってロンドンへ向けての電報を作成した。クリップス大使も夜更けまで作業を続け、就寝したのは深夜一時過ぎであった[92]。

このような数々の摩擦と緊張が見られるものの、戦争の轟音の聞こえる中クレムリンで英ソ会談を行った意義は小さくなかった。実際にこの会議に参加していたクリップス大使も、「昨日は、世界の歴史で最も重要な一日だった！」と興奮して記している。というのも、「戦後の諸問題へ向けての政治的な合意」の可能性が見いだされたからだ[93]。確かに、イギリスとソ連という二つの大国が手を携えて、ナチス・ドイツと共に戦う決意をし、戦後秩序の輪郭を共に描くことは、限りなく大きな意味を持っていた。そのことをクリップスは感じたのであろう。とはいえ、スターリンの語る「戦後構想」、すなわち国境線画定についてイギリス政府としても譲歩は出来ない。ナチス・ドイツが軍事力で領土を併合したようなことを、スターリンのソ連は外交で行おうとしていたからだ。一二月一七日の会談でもスターリンは、合意文書作成にも関心があるが、「本当に関心があるのはロシアの将来の国境線だ」と語っていた[94]。

一二月一九日、イーデンはスターリンと最後の会談を行うことになった。一時間ほど会談を続けた後に、スタ

ーリンは「あなた方一行が夕食を私とご一緒するのはいかがでしょうか」と尋ねた。すでに遅い時間になっていたが、クレムリンでの夜一〇時からの遅めの夕食の招待を受け入れることにした。[95] イーデンはスターリンの隣に座り、翌日がスターリンの六二歳の誕生日であることから、彼の健康を祈って乾杯を行った。それはとてもリラックスした空気に包まれた懇談の機会であった。スターリンはイギリス政府代表団に向かって、「自分は決して午前四時前にベッドに向かうことはない。しかし一一時半前には起きない」と語っていた。このスターリンの生活のリズムに、イギリスの外交官たちもつきあうことになり、深夜の午前一時に夕食を終えてから、シャンパンを飲みながら二つの映画を鑑賞することになった。スターリンもすっかりと酔いがまわり、会食が終わったのは朝方の五時である。イーデンが回顧録で記すには、これはおそらく半年前にドイツ軍がソ連侵攻を開始してから、スターリンにとって最初の優雅でくつろいだ晩餐であった。[96] ソ連の国境線画定問題など多くの火種を残しながら、イギリス政府の善意をスターリンに伝えるには十分な会談であった。会話の最後でスターリンは次のように述べた。「イギリスはまだソヴィエトに疑念を抱いている。ソヴィエトはイギリスに疑念がある。この会談は、その双方を払拭するのに大きな貢献をした」。[97]

翌日、イーデンはチャーチル首相宛の電報で次のように記した。「われわれの作業は、友好的な雰囲気の中で終了した。最後のスターリンとの会談が最良のものであり、訪問は価値があったと確信している」。[98] イーデンは一二月二二日にモスクワを離れて、再び巡洋艦ケントに乗り込み危険海域をくぐり抜けて一路イギリスへ向かった。一二月三〇日、一九四一年が幕を閉じる直前にイーデン外相はロンドンに到着し、モスクワ訪問の困難な任務を無事完了した。それとともに、英ソ間の戦争協力、さらには「大同盟」へ繋がる足場がつくられていった。この頃にチャーチル首相は、アメリカの首都ワシントンで、英米関係の強化へ向けた交渉を続けていた。イーデン外相のモスクワでのスターリンとの会談、そしてチャーチル首相のワシントンでのローズヴェルトとの会談を

基礎として、次第に「大同盟」の実体が浮かび上がっていくのである。

（以下、（二）に続く）

（1） Winston S. Churchill and President Franklin D. Roosevelt to J. V. Stalin, 12 August 1941, The National Archives (TNA), CAB66/18, W.P. (41) 202, August 20, 1941, Annex II; and also in Martin Gilbert (ed.), *The Churchill War Papers, Volume III: The Ever-Widening War 1941* (London: William Heinemann, 2000) pp.1065-6, hereafter cited as TCWP, III; Winston S. Churchill and Franklin D. Roosevelt, Joint Message to Stalin, August 14, 1941, in Susan Butler (ed.), *My Dear Mr. Stalin: The Complete Correspondence of Franklin D. Roosevelt and Joseph V. Stalin* (New Haven: Yale University Press, 2005)pp.41-2. 後者では日付が「八月一四日」となっているが、これは大西洋憲章の公表を二日後の一四日としていたからである。

（2） Ibid.

（3） これまでしばしば指摘されてきたように、英語における「ユナイテッド・ネーションズ」という言葉は、日本語においては「連合国」と「国際連合」という二つの用語へと意図的に使い分けられている。これにより、日本においては「ユナイテッド・ネーションズ」の戦中と戦後との意識的な断絶が見られるが、英語においてはその二つはおなじ用語であってそのような断絶の意識は薄い。本稿では、一九四二年一月一日の「連合国宣言」はこれまで同様の用い方をして「連合国」とし、戦後構想に該当する場合には「国際連合」あるいは「国連」と称する。他方で、この両者を包摂する場合には、「ユナイテッド・ネーションズ」と表記することにしたい。

（4） このようなイーデンの役割については、細谷雄一『外交による平和—アンソニー・イーデンと二〇世紀の国際政治』（有斐閣、二〇〇五年）四八頁参照。

（5） The National Archives, CAB66/18, W.P. (41) 195, August 16, 1941, memorandum by Anthony Eden, "Post-War European Needs: Proposed Allied Meeting".

（6） この経緯については、細谷雄一「『国際連合』の起源—戦後構想をめぐる英米関係、一九四一年」『法学研究』第七八巻、第八号（二〇〇五年）を参照。

（7） TNA, CAB66/18, W.P. (41) 195.

（8）英米を中心としたその戦略と外交については、Mark A. Stoler, *Allies in War: Britain and America against the Axis Powers 1940–1945* (London: Hodder Arnold, 2005) pp.18-37 および赤木完爾『第二次世界大戦の政治と戦略』（慶應義塾大学出版会、一九九七年）第一章を参照。

（9）David Dutton, *Anthony Eden: A Life and Reputation* (London: Arnold, 1997) p.182.

（10）Anthony Eden, *The Reckoning* (London: Cassell, 1965) p.269.

（11）Stafford Cripps to Winston Churchill, 6 July 1941, in Gabriel Gorodetsky (ed.), *Stafford Cripps in Moscow 1940–1942: Diaries and Papers* (London: Vallentine, 2007) p.119. Hereafter cited as SCM.

（12）Ibid., p.114.

（13）Dutton, *Anthony Eden*, p.182.

（14）"Draft Resolution", Annex A to CAB66/18, WP.(41)195, "Post-War European Needs: Proposed Allied Meeting".

（15）TNA, CAB65/19, W.M.(41)83, August 18, 1941.

（16）TNA, CAB66/18, W.P. (41) 196, August 19, 1941, memorandum by Eden, "Post-war European Needs: Proposed Allied Meeting".

（17）TNA, CAB65/19, W.M. (41) 84, August 19, 1941. チャーチルとローズヴェルトとの会談の詳細は、TNA, CAB66/18, W.P. (41) 203, August 18, 1941, "Conference between the Prime Minister of the United Kingdom and the President of the United States: Telegrams exchanged between this country and the Prime Minister, or those forming part of the Delegation accompanying him, 8–17 August, 1941", および、TNA, CAB66/18, W.P. (41) 202, August 20, 1941, memorandum by Churchill を参照。

（18）同様の内容の警告を、チャーチルは八月二八日に、ハリー・ホプキンス宛の書簡で伝えている。そこでは、「もしも一九四二年になってロシアが打ち倒され、イギリスが孤立していたとすれば、あらゆる種類の危機が訪れるであろう」と書かれている。Churchill to Harry Hopkins, 28 August 1941, TCWP, III, p.1125.

（19）TNA, CAB65/19, War Cabinet 84 (41), 19th August, 1941, Secretary' File.

（20） TNA, CAB65/19, W.M.(41) 86, August 25, 1941.

（21） TNA, CAB65/19, Stalin to Churchill, 13 September 1941.

（22） TNA, CAB65/19, W.M. (41) 94, September 18, 1941.

（23） TNA, CAB65/19, Churchill to Stalin, September 21, 1941.

（24） Churchill to Attlee, 12 August 1941, TCWP, III, p.1063.

（25） TNA, CAB65/19, War Cabinet 84 (41), 19th August, 1941, Secretary' File.

（26） Churchill to Lord Beaverbrook, 30 August 1941, TCWP, III, p.1136.

（27） 細谷『外交による平和』四九頁。

（28） Churchill to Lord Beaverbrook, 30 August 1941, TCWP, III, p.1137.

（29） Sir Stafford Cripps to Anthony Eden, 4 September 1941, TCWP, III, p.1159; Cripps to Foreign Office, 4 September 1941, SCM, pp.153–4.

（30） Churchill to Cripps, 4 September 1941, TCWP, III, pp.1158–9.

（31） Stalin to Churchill, 4 September 1941, Kremlin, TCWP, III, p.1160.

（32） Eden, *The Reckoning*, p.275.

（33） Ibid.

（34） Eden to Cripps, 4 September 1941, TCWP, III, p.1163.

（35） Ibid.

（36） CAB65/19, "War Cabinet: Minutes, 8 September 1941", TCWP, III, p.1183.

（37） TNA, CAB65/19, WM(41)94, September 18, 1941.

（38） 大西洋会談以後の英米協調とロシアおよび日本との関連性については、David Reynolds, *From Munich to Pearl Harbor: Roosevelt's America and the Origins of the Second World War* (Chicago: Ivan R. Dee, 2001) pp.134–151 を参照。この時期に、ローズヴェルト大統領の外交政策によって、アメリカの外交、独ソ開戦、日本問題などが結びつくことで、依然としてアメリカが参戦しないながらも戦争が「グローバル化」していく様子が見事に

描かれている。

(39) TNA, CAB65/19, Churchill to Stalin, 21 September 1941.

(40) Churchill to the Duke of Windsor, 22 September 1941, TCWP, III, pp.1250–1.

(41) この点については、細谷雄一「チャーチルのアメリカ」『アステイオン』第六九号（二〇〇八年）を参照。

(42) Churchill's Speech at House of Commons (Hansard), 30 September 1941, TCWP, III, p.1279.

(43) この時期の英ソ間に深く根付いている相互不信については、秋野豊『偽りの同盟—チャーチルとスターリンの間』（勁草書房、一九九八年）が詳しい。

(44) Cripps' diary, 30 September 1941, SCM, p.170.

(45) Cripps' diary, 21 September 1941, SCM, p.163.

(46) W. Averell Harriman and Elie Abel, *Special Envoy to Churchill and Stalin, 1941–1946* (New York: Random House, 1975) p.84; Butler (ed.), *My Dear Mr. Stalin*, pp.44–45.

(47) Beaverbrook to Churchill, 2 October 1941, TCWP, III, p.1295.

(48) Ibid.

(49) TNA, CAB66/19, WP(41)238, October 8, 1941, note by Beaverbrook, "Moscow Conference"; Cripps' diary, 2 October 1941, SCM, pp.174–7.

(50) Beaverbrook to Churchill, 2 October 1941, TCWP, III, p.1295.

(51) Stalin to Roosevelt, October 3, 1941, in Butler (ed.), *My Dear Mr. Stalin*, p.45.

(52) Geoffrey Wilson to John Cripps, 2 October 1941, SCM, pp.170–1.

(53) Cripps' diary, 1 October 1941, SCM, p.173.

(54) Eden, *The Reckoning*, p.1941.

(55) Ibid.

(56) Dutton, *Anthony Eden*, p.181.

(57) Ibid., p.185.

(58) TNA, CAB66/19, WP(41)272, November 15, 1941, memorandum by Eden, “Relations with Russia”; Eden to Cripps, October 21, 1941.

(59) Eden, *The Reckoning*, p.280.

(60) TNA, CAB66/19, Eden to Cripps, November 10, 1941.

(61) Ibid.

(62) TNA, CAB66/19, Eden to Cripps, November 10, 1941; Stalin to Churchill, 11 November 1941, TCWP, III, p.1431.

(63) “War Cabinet: Confidential Annex”, 11 November 1941, TCWP, III, p.1433.

(64) Eden, *The Reckoning*, p.282.

(65) Dutton, *Anthony Eden*, p.186.

(66) Ibid., pp.186–7.

(67) Eden, *The Reckoning*, p.283; also Churchill to Stalin, 21 November 1941, TCWP, III, p.1486.

(68) Ibid.

(69) Churchill to Eden, 23 November 1941, TCWP, III, p.1499.

(70) TNA, CAB66/19, Churchill to Stalin, 4 November 1941.

(71) Eden, *The Reckoning*, p.285.

(72) Ibid.; Dutton, *Anthony Eden*, p.188.

(73) Eden, *The Reckoning*, p.286; Oliver Harvey Diary, 8 December 1941, TCWP, III, p.1586; Cadogan diary, 8 December 1941, in David Dilks (ed.), *The Diaries of Sir Alexander Cadogan* (London: Cassell, 1971) p.417. Hereafter, cited as DAC.

(74) Eden, *The Reckoning*, p.285.

(75) Ibid., pp.287–8. イーデンのモスクワ訪問の様子は、そこに参加したイーデンやカドガンの回顧録に加えて、Jonathan Fenby, *Alliance: The Inside Story of How Roosevelt, Stalin & Churchill Won One War & Began Another*

(London: Simon & Schuster, 2006) pp.87–94 しゃ詳しい。

(76) Cripps' diary, 16 December 1941, SCM, p.221; Cadogan diary, 15 December 1941, DAC, p.420.

(77) TNA, CAB66/20, WP(42)8, January 5, 1942, memorandum by Eden, "Mr. Eden's visit to Moscow".

(78) TNA, CAB66/20, WP(42)8, January 5, 1942, "Document II. Record of an interview between the Foreign secretary and M. Stalin, December 16, 1941,at 7pm".

(79) TNA, CAB66/20, WP(42)8, January 5, 1942, memorandum by Eden on conversations with M. Stalin, December 16–20, 1941, and also "Annex III, Treaty concerning the Creation of a Mutual Understanding between the Soviet Union and Great Britain in Regard to the Solution of Post-war Questions, and concerning their Common Action to ensure Security in Europe after the Termination of the War with Germany, Soviet draft December 16, 1941, 10pm"; Eden, *The Reckoning*, p.289; Cadogan diary, 15 December 1941, DAC, p.420.

(80) Eden, *The Reckoning*, p.290.

(81) TNA, CAB66/20, WP(42)8, January 5, 1942, "Document II. Record of an interview between the Foreign secretary and M. Stalin, December 16, 1941, at 7pm".

(82) 戦時中のイギリス政府内での「欧州審議会」および「西欧同盟」の構想については、細谷雄一「『新しいヨーロッパ協調』からシューマン・プランへ　一九一九―五〇年―世界戦争の時代のイギリスとヨーロッパ」細谷雄一編『イギリスとヨーロッパ―孤立と統合の二百年』（勁草書房、二〇〇九年）七五―七九頁参照。

(83) TNA, CAB66/20, WP(42)8, January 5, 1942, memorandum by Eden, "Mr. Eden's visit to Moscow"; also "Document III. Record of an interview between the Foreign secretary and M. Stalin on the night of December 17, 1941, Midnight".

(84) そもそも、そのような英ソ間での領土をめぐる秘密協定が結ばれることを懸念して、アメリカ政府が八月の大西洋会談で「領土不変更」や「民族自決」の項目を事前に挿入したことを、英米関係に詳しいデイヴィッド・レイノルズは的確に指摘している。David Reynolds, *The Creation of the Anglo-American Alliance 1937–41: A Study in Competitive Co-operation* (London: Europa, 1981) p.257.

(85) Ibid.

(86) TNA, CAB66/20, WP(42)8, January 5, 1942, “Document II. Record of an interview between the Foreign secretary and M. Stalin, December 16, 1941, at 7pm”.

(87) TNA, CAB66/20, WP(42)8, January 5, 1942, “Document II. Record of an interview between the Foreign secretary and M. Stalin, December 16, 1941, at 7pm”; Eden, *The Reckoning.*, p.292.

(88) TNA, CAB66/20, WP(42)8, January 5, 1942, “Document II. Record of an interview between the Foreign secretary and M. Stalin, December 16, 1941, at 7pm”; DAC, pp.420–1.

(89) TNA, CAB66/20, WP(42)8.

(90) Ibid.

(91) Ibid.

(92) Cripps’ diary, 16 December 1941, SCM, p.223.

(93) Ibid., p.221.

(94) TNA, CAB66/20, WP(42)8, January 5, 1942, memorandum by Eden on conversations with M. Stalin, December 16–20; Cadogan diary, 17 December 1941,DAC, p.422.

(95) Cadogan diary, 20 December 1941, DAC, pp.422–3.

(96) Eden, *The Reckoning*, p.303.

(97) TNA, CAB66/20, WP(42)8, January 5, 1942, memorandum by Eden on conversations with M. Stalin, December 16–20.

(98) Ibid.